

佐谷画廊恒例のオマージュ瀧口修造展は今回「平沢淑子展」で27回を迎えます。今回の展覧会カタログのテキストとして、巖谷國士さんから「瀧口修造の「速達便」——平沢淑子展のために」と、鶴岡善久さんから「深層としての海、そして山——平沢淑子を誤解する権利」をいただきました。巖谷さんはシュルレアリスムおよび瀧口修造の研究ではわが国の第一人者で、現在、明治学院大学文学部長でいらつしゃいます。一方の鶴岡さんも、みずず書房が刊行した「コレクション瀧口修造」全14巻の監修をされた、やはり瀧口修造研究の第一人者で、アンリ・ミショーについても造詣が深く、平沢淑子のしごとを長年見つめてこられた詩人でもあります。テキストをお寄せくださったお二人に深謝いたします。平沢淑子の理解のために、これら二篇の文章をお読みいただければ幸いです。

なお、会期中11月5日(土)にはギャラリーで巖谷さんが「瀧口修造と平沢淑子」をテーマに講演をしてくださることになっています。もちろん平沢さんも出席される予定であります。

さて、私が平沢淑子の作品を初めて見たのは1982年7月、富山県立近代美術館の「第1回現代芸術祭——瀧口修造と戦後美術」のオープニングパーティに出席した時です。今カタログを見ると「ラ・マレーヌ2」「ラ・マレーヌ3」「裏箔のない鏡」の3点が出品されています。因みにこの展覧会では瀧口修造を含め29名の作家の作品107点が展示されていました。平沢淑子はこのカタログの中で、次の言葉を瀧口先生に捧げています。

私の鏡に映るイリュミネーションは 天啓の詩人がいなくて 風に吹き消されてしまうのです。

その風にはじめて七色の色彩を置いて下さった瀧口先生。

パリ、トーキョー、ひそやかなシュルレアリスム・シルクロードは絶断えてしまったいまも、

おわりなく続く私のテラン・バーグ(空地)の旅は、いつも先生の贈って下さった風と水と光で創られた虹のピラミッド に守られています。

神が 人生にひたかくしにしているいちばん美しいだからものを、きっとみつけないと 導いて下さっているようです。

パリ 1982年

私がパリで平沢淑子さんに会ったのは1984年、パリ・東京現代美術交流展でドゥニー

ズ・ルネ画廊を訪ねた時だったと思う。フジテレビギャラリーの渡辺葵さんとともに、淑子さんの車で走り回ったことを記憶しています。その際、お互いに瀧口修造先生を話題にしたことから、淑子さんから私のオマージュ瀧口修造展にも出展したいと申し出があり、その後もたびたびお手紙をいただきました。

今回この「平沢淑子展」が実現することになったのは、秋田市立千秋美術館で「平沢淑子・アート軌跡」展が今年9月2日から10月10日まで開催されたとが契機となっています。同時に、フジテレビギャラリーの山本進さんが共催というかたちで会場を提供して下さいたことはありがたいことでもあります。私だけの力では開催は不可能でした。

去る9月14日、私の自宅で平沢さんを中心に、フジテレビギャラリーの渡辺さんと北野実々子さん、佐谷画廊からは私と妻と山田恵の計6名で午後2時半から8時半まで6時間、展覧会の準備にあたり忌憚無く意見を交換しました。お互いに新たな収穫、発見があり、何より楽しかった。翌日、平沢さんはパリへ帰られたが、それぞれ新しい出発が見えてきた素晴らしい打ち合わせ会でありました。

平沢淑子はシュルレアリストの作家であることはもちろんですが、極めてすばらしいのは人物の描写力です。アンドレ・ピエール・ド・マンディアルグ(1981年)、ジャン・ピエール・ファイ(1982年)、フィリップ・ド・ロトシルド(ロスチャイルド)男爵(1998年)の肖像など、素晴らしい作品です。いずれ瀧口修造を描いたドローイングがうまれてくるのを期待しています。

最後に、お名前を記しませんが、この展覧会を開催するにあたり、多くの方々にお世話になりましたことを感謝いたします。ありがとうございました。

平沢淑子さんの「風・水・光」の輝きがさらに鮮やかになりますように期待しております。ご健勝をお祈りいたします。